

Title	「心身の病とたましいのケア：大切だけど忘れがちなこと」報告（2014年度聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催スピリチュアルケア研究講演会）
Author(s)	越智，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :52-53
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5270
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014 年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催
スピリチュアルケア研究講演会

「心身の病とたましいのケア—大切だけど忘れがちなこと—」 報告

2015年1月16日に、聖学院大学総合研究所主催でスピリチュアルケア研究講演会が開催された。この講演会の参加者は51名で、聖学院大学内の教授会室で実施されている。今回は、「心身の病とたましいのケア—大切だけど忘れがちなこと—」をテーマに、聖学院大学人間福祉学科准教授の田村綾子先生が、精神保健福祉士としての職場経験と自身の看取り経験を踏まえ講演されている。以下、講演内容にそって順次に報告していきたい。

1. 心身の病が人に与える影響とそのケア

ここでは、ストレスとストレス反応について説明している。

人には無意識のうちに防衛反応を働かせている。そのため、こころとからだの抱える不調は、それぞれ双方に反応することや、または、他の機能へと連鎖的に反応することがある。その上、ストレスは自他ともに認識が困難であるため、セルフケアとしての状況対処も難しい。その結果、自身の生活を脅かし、支障をきたすこともある。重要な

のはストレス反応を自身で理解し、小さな異変を見逃さないようにすることである。演者は、これについて事例として、失業、つまり職業喪失に対する連鎖反応について説明している。

職業喪失以外にも、人は長い人生の中で、有形・無形のさまざまな対象を喪失する。ここでは、自己喪失の種類について説明している。①できていることができなくなる（能力の喪失）、②やりたいことがなくなっていく（意欲の喪失）、③自分の持ち物が減ってゆく（成果の喪失）、④人とのかわりが減ってゆく（関係性の喪失）、⑤自分の役割が減ってゆく（価値（意味）の喪失）、⑥自分の未来が閉ざされてゆく（未来・希望の喪失）である。また、これらも相互連鎖しているため、1つの喪失で悪循環に陥る可能性もある。

2. 「生きなおし」の支援

こういった、自己喪失を経験している人たちに對して、「生きなおし」の支援が提言されている。①自らの人間性や人生体験をもとにし「人が人と出会い、語り合い、聞きあう」こと（それしかできないと痛感し無力感を抱える）、②追い詰められた暮らしの打開に向けて、周囲の人たちとの関係調整や資源活用に働きかけること（ご本人にその気が出ないと難しいことも多い）、③「不安」や「悩み」を共に抱えることである。あなたのがんばっている姿を知っている私がいるということを伝え続けること、時間を共に過ごすことで「生きなおし」の転機に携われるのである。

3. 希望を見出す限界（限界はある）

支援者が、喪失について知識をつけ、個人の状況に対する理解を深め、支援方法を収斂していても、全ての喪失体験者が希望を見出せるわけではない。当事者が意思や意欲を表出しないとかかわりにくいからである。支援者は、つつい、社会資源の活用用法や生活実態の変化に対する支援に



上段左：田村綾子准教授（講演者）
上段右：窪寺俊之教授
下段左：阿久戸光晴理事長

価値を置きがちである。これら問題解決を図ることは、いわゆる未来志向の支援と呼ばれている。死にゆく者のニーズとは異なることが少なくない。支援者にとってその役割を見出すことが困難な場合もあり、その結果、支援者の中にはターミナルケアやスピリチュアルケアにおける役割意識が乏しい者もいる。

4. 死にゆく人への支援とは

死にゆく人のニーズには、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルの4つのニーズがある。これらニーズの関係性は並列的であるとの見解を示す者もいるが、演者は、人間のニーズの中心に位置するのはスピリチュアルであり、他のニーズは、その周囲に位置するものであるとしている。また、ニーズの充足も、スピリチュアルと他とでは充足への働きかけの方向性が異なる。身体・精神・社会的ニーズへは、外からの働きかけで充足が可能であるが、スピリチュアルは個人の内省により充足される。つまり、外からの働きかけだけのケアは意味をなさないということである。

5. たましいのケア

最後に、スピリチュアルケアとして、たましいのケアについて考えていく。人は、生きている中で、自分を支えていくための大切なものが幾つかある。例えば、①形のある大切なもの、②大切なアクティビティ（活動）、③大切な人、④形のない大切なものなどがある。喪失の中では、これららの大切なものが次々と奪われていくといったことを度々経験することがあるかもしれない。しかし、そういった経験の中でも、支援者は、喪失を経験している者に対して、人は死ぬときその瞬間まで生きていること、全人的「人」として支えること、人は死んでも生きている、いわゆる死んでも終わりではないことを拠り所にし、かかわり続けることが大切だと思われる。

(文責：越智裕子 [おち・ゆうこ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程3年)